本興寺だより

令和二年
八月
第二一二号

「願わくばこの功徳をもって、あまねく一切に及ぼし、われらと衆生と、皆ともに仏道を成ぜん」

（法華経　化城諭品第七）

八月の盂蘭盆を迎えます。今年は新型コロナウイルスの影響もあり、家族や親族の帰省や懇親が大きく様変わりしそうなことは残念なことです。

何処にあっても、ご先祖への敬意と感謝を思い起こし、ご供養の気持ちを新たにするのがお盆です。

「供養」という言葉には［尊敬］の意味があり、次の三つの行いを指しています。

① 仏様・諸々の神々・菩薩に対して香や花・燈明や供物を捧げ尊崇の気持ちを表すこと。

② 追善供養―ご先祖・亡き人に対して、仏壇やお墓の前でお参りして報恩の気持ちを表すこと。

③ 行供養―善い行いを心掛け仏道修行を行うこと。

供養とは、一般に思われている②の追善供養だけではありません。①の仏様や神々への供養が何よりも大切であり、私達にご加護が頂けるのです。

また③の自分の善い行いが善い報いとなって功徳となり、ひいては亡き人への功徳へ廻っていくのだと云われています。

二年前の国際調査によると、世界人口の七割以上が神や仏を信じているとあります。日本は七割の人が信仰心がないと思っていると答えています。しかしお墓詣りに行かれる人は九割に達すると云われます。お墓参りは行事として慣習になっていても、本心から御霊の存在を信じている人は多くないのです。

お盆の行事には、七夕・盆踊り・迎え火・送り火・灯籠流し・花火大会・中元などがあります。これらの行事は、亡き御霊への感謝と供養の気持ちを表す形として継承されてきていますが、そこには道徳的に大切であるのみならず、単に生者から死者への一方通行の気持ちではなく、本当に通じ合える魂の世界が事実としてあるのだと仏様は云われます。

私達とご先祖は、分離しているのではなく、互いに融合（行き来し合う）しているのです。

人は皆幸福を求めて生きているつもりでいます。しかし実際は多くの苦悩に出会います。それは何故か？仏様は云われます。「人は、好きなこと・望むことがたくさん手に入り、嫌なこと・つらいことが減っていくほど幸せが増してくると思っている。しかしその考えに固執すれば、何時まで経っても真の幸せと安らぎは得られない」のだと。一つ願いが叶うと次の欲の願いが出てきます。欲が増えると悩みも増えるのです。ちょうど建物が高くなるほど影が多くできるように。コインの両面のように、表と裏、苦と楽は切り離せないのです。一方を取り寄せ、片方を切り捨てる考えが苦悩を増すのだと云われます。飛行機の両翼のように、ともに素直に受け入れていく中から道が明るくなり、運命の飛躍が開かれてくるのだと云われます。

人生はいろいろな悩みにぶつかりながら前へ進む旅であります。

日蓮聖人は、如何なる困難な時でも、一人の人の心の中に二つの心があって、始終自分の心を統一することができない有様であれば、その人の願いが成就することは決してないのだと云われています。迷いの心、不信の心、悪しき心が正しい心と行動を妨げるのです。

人間には他人に良く見せたい外面とは別に、本音という人に知られたくない面もあります。しかし本音にある自分の弱点や甘え、愚痴を冷静に見つめ、気持ちの切り替えとストレスをコントロールできる強い自分に変えていくことが大切だと云われます。

地蔵菩薩という仏様はお地蔵さんとして慕われていますが、大地が全ての命を育む力を蔵するように、人々の苦悩を無限の慈悲で包んで救うように、お釈迦様から付属を受けた仏様です。

この菩薩の化身は閻魔大王（えんまだいおう）です。閻魔大王は冥界（あの世）の王として死者の生前の罪を裁かれるのです。

お地蔵さんはいつもにこにこ顔で語りかけていますが、閻魔大王は厳しい怖い形相をしています。

仏様は私達を、地蔵さんのように優しく救いの手を差し伸べるけれども、無条件ではなく、その前に閻魔大王のように、お前の生き方を「正すべきところは正すぞ」という強い意志で裁きをされるのです。

私達は、何時でもお地蔵さんのように柔和な顔を保つことは容易ではありません。嫌なことがあるとすぐ閻魔大王のような怖い顔になります。

本当は自分をいつも閻魔さんのように厳しく見つめ、他人に対してどんな時でも柔和な顔を忘れないことが大切なのです。

人間は亡くなれば皆閻魔大王の前で生前の行いを自ら回想し反省させられると云われます。鏡にありのままの姿が映るように嘘や偽りは通用しないのです。また家族の宿縁の深さに初めて気付くとのことです。

死者の御霊の安らぎを願う家族の祈りも、先祖の御霊が家族が幸せでいてほしいと願う祈りも、家族の心を込めた供養と生き方によって、その力も通じ方も増すのだと教えています。

合掌

本興寺住職　中谷聰秀